

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Development of Ecotourism and Its Experiment in Fuji Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真板, 昭夫, 海津, ゆりえ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002089

フィジー諸島におけるエコツーリズム開発とその実験的試み

真板 昭夫

(京都嵯峨芸術大学芸術学部)

海津 ゆりえ

(資源デザイン研究所)

The Development of Ecotourism and Its Experiment in Fiji Islands

Akio Maita

(Kyoto Saga University of Arts)

Yurie Kaizu

(Earthwork)

フィジーは、南太平洋地域の中ではバブア・ニューギニアと並ぶ中心的な国となっている。主要産業はサトウキビと観光産業であり、主としてオーストラリア、ニュージーランド、米国、日本の観光客を平均年間4万人受け入れている。この国における再赤貧のランクに位置付けられる、ある山間小集落の経済の活性化と、集落を取り囲んでいた貴重な自然資源の保全を両立させるため、日本や、ニュージーランドのNGOを中心とする国際協力によってエコツーリズムを導入した。本稿ではメンバーの一人としてこのプロジェクトにかかわった筆者らが、7年間のプロセスとその開発の内容を整理するとともに、エコツーリズムが小集落にもたらした社会的、経済的な波及効果分析を行った。

結論として、①地域社会への経済効果、②人材の活性化としてのウーマンズクラブの活動、③環境保全意識・ヴァヌア・スピリット (Vanua Spirits) の高揚、④生活の質の改善、などの4つの重要なポイントを明らかにすることができた。また他の地域での環境保全を伴った持続可能なエコツーリズム開発のために、このプロジェクトを通して明らかとなった、開発のプロセスパターンおよび必要な組織・人材の役割分担・相互関係の模式化を行った。

The Republic of Fiji is a central country to rank with Papua New Guinea in the South Pacific area. The key industries are sugar cane and tourism. The visitors of annual averages of 40,000 are accepted (from Australia, New Zealand, the United States,

Japan, etc.). Ecotourism was introduced by the international cooperation that centers on NGO of Japan and New Zealand in order that the economic activation of small villages in the mountainous region placed on poorest rank in this country could be compatible with the preservation of the precious natural resources. In this paper, we will state the process for seven years being concerned with the project as a member, and the contents of that development. The following 5 points are recognized; 1) social and economical effect brought to the village by ecotourism, 2) economical effect to the community, 3) activities of Women's Club as an activation of talented people, 4) improvement of the senses of environment preservation and *Vanua Spirits*, 5) improvement of quality of life. Through this project, we considered the process pattern of the development, part assignment of necessary organization and talented people, correlation of them for the Sustainable Development of Ecotourism in other areas.

1. はじめに	4.2 資源認識のためのエコツーリズム資源マップ作成
2. アンバザ村の概要	4.3 エコツーリズムガイドブック作成
2.1 アンバザ村の歴史・自然とエコツーリズム開発前の社会状況	4.4 モデルツアーの実施
2.2 地域の抱えていた問題点と課題	4.5 環境保全としてのモデルトイレの建設
2.3 エコツーリズム取り組みのきっかけと現状	5. エコツーリズム開発による社会への波及効果
3. エコツーリズム開発のプロセス	5.1 地域社会への経済効果
3.1 コロヤニツ国立遺産公園とエコツーリズム開発のプロジェクト	5.2 人材の活性化としてのウーマンズクラブの活動
3.2 太平洋経済協力会議のエコツーリズムプロジェクト	5.3 環境保全意識としてのヴァヌア・スピリットの高揚
4. エコツーリズム開発の成果	5.4 生活の質の改善
4.1 人材育成としてのエコツーリズム研修	6. アンバザ村エコツーリズム開発を通して得られた考察

Key words: tourism, ecotourism, human resources development, Fiji, South Pacific

キーワード：観光, エコツーリズム, 人材育成, フィジー, 南太平洋

1. はじめに

フィジーは、太平洋の南西部、南回帰線の北に位置する、300以上の島々で構成された国である。人口約78万人で、南太平洋地域の中ではパプア・ニューギニアと並ぶ中心的な国とな

っている。主要産業はサトウキビと観光産業であり、主としてオーストラリア、ニュージーランド、米国、日本の観光客を平均年間4万人受け入れている。国の外貨獲得額の大部分を観光産業が担っており、フィジーのGDPの24%を産出していると推定されている。また間接・直接的に約4万人の雇用を生み出しており、これは全労働人口の15%に相当する。

土地所有形態は部族所有が中心であり、全土の83%を占める。1874年に英国による植民統治が始まる前まで、白人による二束三文での土地買収が行われた。フィジーの代名詞とも言えるであろう、南の島のリゾートホテルの多くは、こうした白人所有の土地に建てられており、外国からの観光客が宿泊する主要な滞在先となっている。

フィジーは、こうした外部資本によるリゾート中心の観光から、エコツーリズムやネイチャーツーリズム、アドベンチャーツーリズム等の新たな側面を持った観光にシフトする意向を持っていた。なかでもエコツーリズムへの関心は以前から持たれていた。なぜならばフィジーの部族社会の伝統が色濃く残されている内陸部や遠隔地の島々へも旅行者を送り込むことができ、また集落を観光産業に参加させることができるため、貧しい地域に経済的利益をもたらすことができるとみなしていたからである。また観光客も、何かを学んだり、これまでにできなかった体験をする機会を求めており、そうしたニーズに応える手段として、エコツーリズムが適していたといえる。このような志向を背景に、1997年には観光・運輸省によって『エコツーリズムおよび村をベースとした観光の戦略 (Ecotourism and Village-Based Tourism : A Policy and Strategy for FIJI)』が発表された。

本論文は、このような国の背景のもとに、それまで観光開発が行われておらず、自然保護と地域への収益還元の必要性に迫られていた内陸部の山村・アンバザ (Abaca) 村地域において行われたエコツーリズム開発を題材に、どのようなプロセスが採られ、どのような効果をもたらしたかを事例報告の形態によって明らかにするものである。なお、アンバザ村におけるエコツーリズム開発は、太平洋経済協力会議 (PECC) を通して筆者らが過去7年間に亘って関わってきたプロジェクトである。

2. アンバザ村の概要

2.1 アンバザ村の歴史・自然とエコツーリズム開発前の社会状況

アンバザ村は、ヴィチ・レブ (Viti Levu) 島西部の都市ラオトカから南東へ車で約30分のコロヤニツ山地に位置している。村を中心にコロヤニツ国立遺産公園⁽¹⁾ (Koroyanitu National Heritage Park : KNHP) として保護されており、周辺にはヴィチ・レブ島西部ではまれな熱帯雨林が発達し、この森を背景とした滝や溶岩性の山々などが特徴的である。

村は1つの親族集団で構成されており、大きく3家族に分かれる。人口は80人程度である。この親族集団は過去何度か集落の位置を移動させており、現在よりも下流の谷間に居住していた。1931年2月に、大規模な土砂崩れにより前集落がほぼ壊滅し、生き残った3人が集落を発展させ、現在に至っている（図1、写真1参照）。

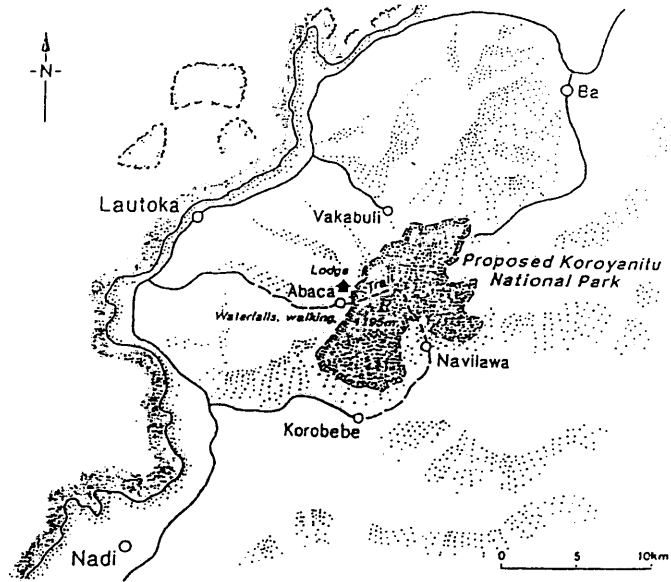


図1 アンバザ村位置図



写真1 アンバザ村の景観

2.2 地域の抱えていた問題点と課題

山岳地域に位置し、道路整備も遅れていたため、アンバザ村の経済活動は周辺地域から孤立した自給自足的なものに留まっていた。1家族の平均現金収入は、タロイモ、キャッサバなどを売って得られる 30~40 フィジードル（以下、FJD）/週に過ぎなかった（United Nations Development Program 1996）。この水準は、フィジーにおける最貧レベルに位置づけられる⁽²⁾。

村におけるサトウキビ栽培、森林伐採などのより商業的な経済活動は、水源保全・森林保全の観点から許可されず、経済水準向上のための有効策はなかなか考えられなかった。

2.3 エコツーリズム取り組みのきっかけと現状

1979 年に行われた調査で、この地域に、南太平洋でも極めて貴重な森林が残されていることが明らかとなり、森林保護の必要性を求める声が高まっていた。だが1988年に地元住民から伐採の申請が出されたことがきっかけとなり、森林保護と地域での収入確保の両立策が必要との認識が高まってエコツーリズムの導入が検討され、ここからアンバザ村のエコツーリズム開発は始まった。ニュージーランドを始めとする NGO、研究者等が、アンバザ村周辺を保護地域へと指定する運動を始める代わりに、村の経済活動を助ける手段としてエコツーリズムの導入を試みたのである。

現在、この村の人々は、エコツーリズムの考え方に基づいて、自然環境に配慮しながら収入を得るために、旅行者へ村を開放し、フィジーの伝統的な歓待方法でもてなしている。

代表的なエコツアーのプログラムには、次のようなものがある。

- ・集落近郊のヴァティラム山へ1時間程度のトレッキングで、ヴィチ・レブ島の海岸線から、水平線上のヤサワ（Yasawa）諸島までの雄大な景観を楽しむ。
- ・フィジーで3番目に高いコロヤニツ山の原生的な山地熱帯雨林を訪れる。天気の良いときには、フィジーで2番目に大きなヴァヌア・レブ島などを望むことができる。
- ・ホームステイプログラムも用意されており、農作物の植え付けや収穫、集落の共同作業への参加など、村の生活を体験できる。

なお、各プログラムでは、村人がガイドとしてついて、自然や文化についての詳しい説明を行っている。

3. エコツーリズム開発のプロセス

3.1 コロヤニツ 国立遺産公園とエコツーリズム開発プロジェクト

国の環境戦略の中でいわれているように、コロヤニツ地域はヴィチ・レブ島の西部における重要な自然森林地域として10年以上も前から地域と政府両方に認められてきた。

土地所有者の法律上の代表として土地信託公社（Native Land Trust Board : NLTB）は、地域

と話し合い、その結果、1980年代後半伐採から森林を守るためコロヤニツ保護地区プログラムが始められた。これがKNHPの始まりである。1993年に国連の南太平洋地域環境計画(South Pacific Regional Environment Programme: SPREP)は土地信託公社からコロヤニツ保護地区の開発の協力を求められ、協力に同意するとともに南太平洋地域生物多様性保全プログラム(South Pacific Biodiversity Conservation Programme: SPBCP)を行うこととし、この地区において、エコツーリズムのような持続可能な利用に限り、開発を認めることとした。

続いて土地信託公社は、森林省及び公園地域内にある6つの村(アンバザ、ナビラワ、ヤロク、ナロタワ、バカンブリ、ナデレ)と会合をもち、上記地域にコロヤニツ国立遺産公園を設立し、公園計画を立てるとともにエコツーリズム開発プロジェクトを開始した。公園計画の主体は保護地区の中心と緩衝地帯とにわたるゾーニング計画である。村の人々の日常生活に必要なものを除いて保護地区内での伐採は禁止され、土地所有者に対しても伐採許可を出すことが中止された。

エコツーリズム開発プロジェクトは、上記の6つの村の中で最も経済的に貧困であったアンバザ村をモデル地域として、試験的に開始されることが決定した。

コロヤニツ国立遺産公園における管理運営組織は図2に示した通りである。土地信託公社、南太平洋地域環境計画、ニュージーランドODA(正式名称が不明)、太平洋経済協力会議(Pacific Economical Cooperation Council: PECC)の協力を得て、6つの村の協同組合から構成される地域評議会によって運営されている。評議会と各村のパーク・マネジャーとの間に南太平洋地域環境計画(SPREP)から派遣されたオフィサーがつき、評議会と各村との間の意見調整や伝達等の役割を果たしている。アンバザ村においては、アンバザ・エコツーリズム・コーポラティブがエコツーリズムの運営に当たっている。

3.2 太平洋経済協力会議(PECC)のエコツーリズムプロジェクト

太平洋経済協力会議は、太平洋地域における経済協力を推進するために発足した国際組織であり、2000年4月現在、日本を含む23の国と地域がメンバーとして加盟している。各国に委員会を持ち、現在11のタスクフォースを設けて活動を行っており、エコツーリズム・プロジェクトもその一つであり、日本が幹事国となっている。

1992年以来、PECCの日本とニュージーランドの委員会は「太平洋地域におけるエコツーリズムの展望」について研究と評価を共同で行ってきており、フィジーがプロジェクトの対象地域となっている。1992年以来、PECCのフィジーエコツーリズムプロジェクトが行ってきた活動は表1の通りである。

アンバザ村のエコツーリズム開発はこのプロジェクトの中心である。これまでに村でワークショップを開催し、村民へのインタビューや村民と共同の地域調査を行い、エコツーリス

ム資源マップとガイドブックを作成した。これらソフト面の活動に加え、PECC は村に滞在する旅行者のためのトイレとシャワーを建設した（表2 参照）。

ニュージーランド ODA は、1993 年来、基盤整備の側面でエコツーリズム開発プロジェクトを支援している。1994 年には 4 輪駆動車を提供、アンバザ・ビジター・センター、ナセロッジ (Nase Lodge)、ロッジへの道の建設、1998 年にはパンフレットを製作、1999 年には標識を作成した。

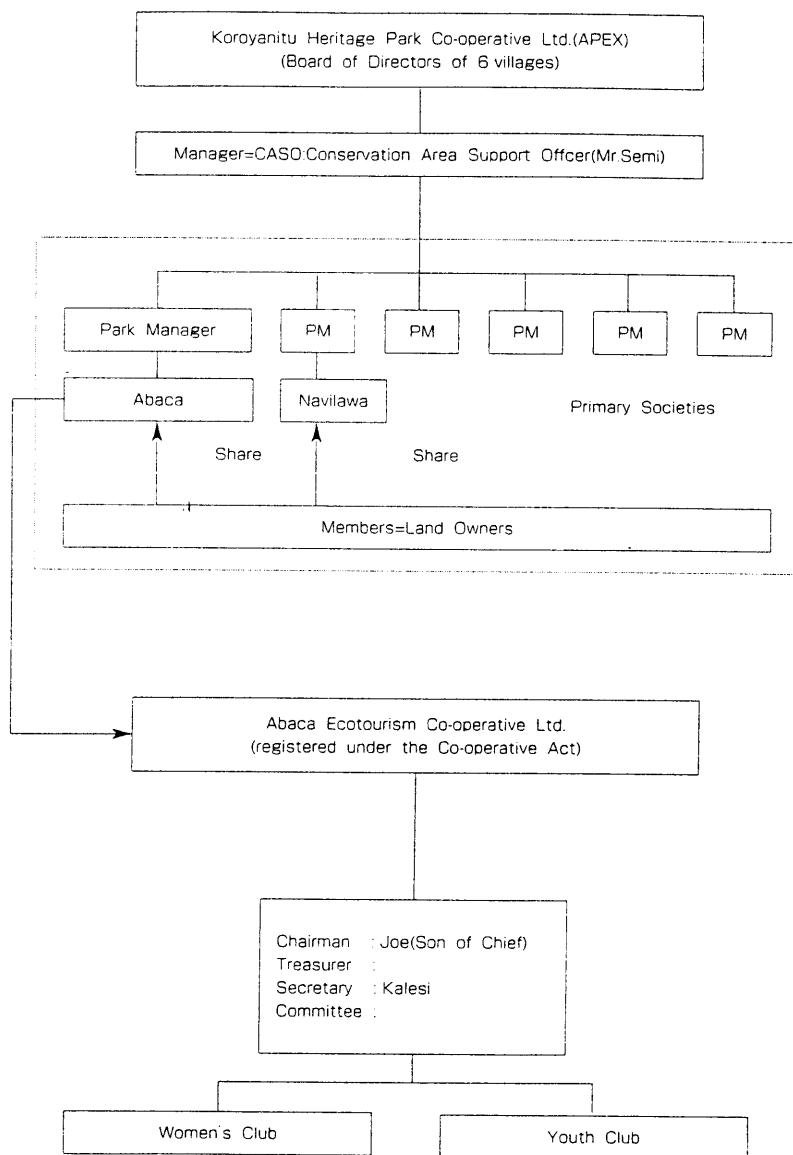


図2 アンバザ村エコツーリズムの運営体制

表1 PECC エコツーリズムプロジェクトのあゆみ

フェーズ	年・月	出来事
第1フェーズ	1992年7月	PECCは10の経済圏の49地域の中から調査対象地域を選定。
	1994年12月	PECC日本委員会とPECCニュージーランド委員会はフィジーのTabuni Hill Fortをエコツーリズム開発のケーススタディー地域として選定し、現地調査を開始。
	1995年5月	ニュージーランドのクライストチャーチで開催された、APECのツーリズムワーキンググループで調査結果を報告。
第2フェーズ	1996年4月	フィジーレポートの中で提案された自然資源保全のための暫定プランがスタート。
	1996年10月	ワークショップの準備開始。
	1997年4月	Lavena村およびTabuni Hill Fortにて、エコツーリズムのプログラム開発および日本におけるケーススタディーについてのワークショップ開催。Lavena村では同時にエコツーリズム資源調査を実施。
	1997年8月	Abaca村においてエコツーリズムのプログラム開発および日本におけるケーススタディーについてのワークショップ開催。同時にエコツーリズム資源調査を実施。
	1997年12月	Abaca村において、日本人旅行者15人から成るパイロットツアーを実施。ツアー終了後、ツアー参加者に対しアンケート調査を実施。
	1998年1月	Abaca村およびLavena村についてエコツーリズム資源マップを作成、フィジー政府観光局に贈呈。
	1998年8月	Abaca村住民に対し、エコツーリズムガイドブック作成のための聞き取り調査。同時に、エコツーリズム導入後の経済効果について聞き取り調査。
	1998年12月	Abaca村にトイレを建設開始。
第3フェーズ	1999年3月	Abaca村エコツーリズムガイドブックを出版。
	1999年4月	KNHPのエコツーリズム開発支援プロジェクトを開始。KNHP内の他の村についてエコツーリズムガイド、エコツーリズム資源調査、エコツーリズムガイドブックの作成、トイレの建設を開始。

表2 PECC エコツーリズムプロジェクトに関わった組織

プロジェクト	組織・人物
ワークショップ	JANPECC NZPECC NLTB Coordinator of SPREP Ministry of Tourism
資源調査・資源 マップ・ガイドブ ック作成	JANPECC NZPECC NLTB The University of the South Pacific Ornithologist Local Applicants for Guide Local People(Women's Group, Youth Group, Chief of Village)
パイロットツアー	JANPECC NZPECC Coordinator of SPREP The Japan Nature Game Institution JTB Fiji
トイレ建設	JANPECC NZPECC NZODA NLTB Ministry of Tourism Ministry of Health Ministry of Environment Local People

4. エコツーリズム開発の成果

4.1 人材育成としてのエコツーリズム研修

エコツーリズムを推進し、資源の保全と地域経済の活性化を図っていくには資源調査や、その結果得られた資源情報を整理し、魅力あるプログラムとして観光客に提供することが重要な要素の1つであり、またそれを適切に紹介するガイドの存在が重要である。

そこで、1997年8月に、アンバザ村内の集会所を使って、村人を主な対象としてエコツーリズム開発についての研修を行い、エコツーリズム資源調査を行った。この研修には、地域でエコツーリズム開発に取り組む政府関係者、村の酋長、村人、自然公園管理官ら30名、研修の現地カウンターパートとしての観光局エコツーリズム課職員1名、日本側調査員7名が参加した。

エコツーリズムは地域の自然資源、文化資源、そして村人の生活そのものが資源となり、村人が主体的に運営することが望まれる。そのためには、村人がエコツーリズムの導入や村の中に存在するエコツーリズム資源の価値について共通認識を持つことが必要である。研修では、村人を対象に、①エコツーリズム導入の基本理念（導入の目的や、運営に関わる主体等）、②資源調査に基づいた資源管理とプログラム開発の重要性（エコツーリズム資源マップ・フェノロジーカレンダー（人と自然の生活暦）・資源リスト等のデータベース作り）、の2点について、スライドなどを用い、約1時間のレクチャーを行った。

このレクチャーを行うにあたって、村内に電気が無いため自家発電機を持ち込んでスライドを映写し、レクチャーの内容は小型ビデオカメラで収録した。これらの機材は、今後同様な地域でのエコツーリズム開発についてのレクチャーなどに役立てるように、政府観光局に寄贈した。

4.2 資源認識のためのエコツーリズム資源マップの作成

アンバザ村のエコツーリズムフィールドとしての特徴は、環状のトレッキングコースが、熱帯雨林と、対照的な環境の草原の両方を通っていて、ツーリストが短時間に2つの全く異なる生態系を観察できることである。レクチャー後、このコース沿いの資源マップを作成することを前提に、村人の参加の下で資源調査を行った。

資源調査を行う際には、ルート周辺の地図、カメラ（ポラロイド＝現場での記録用、一眼レフ＝マップ作成用）、万歩計、コンパス、フィールドノートを用意した。

調査中は、村人とともにルートを歩きながら、エコツーリズムの資源となりうるもの（例えば、巨木、熱帯海岸林、ラン科植物、薬用植物、滝など）をポラロイドカメラで撮影し、写真の余白には地点番号と村での呼び名を記入した。また、その位置を周辺の地形や歩いた距離（万歩計の歩数から計算）から判断し地図上に地点番号と村での呼び名を記録した。同時に村人

にこれらの資源の特徴（花や実の生る時期、生活の中での利用法、昔からの言い伝えなど）について聞き取り、フィールドノートに記録した。

これらの調査結果を基に、カラー写真や解説文を加えてデザインし、A0サイズの「アンバザ村エコツーリズムマップ」を作成した。このマップは、村と政府観光局に併せて50部寄贈し、人材育成やマーケティングの局面で活用されている（図3 参照）。



写真2 エコツーリズム研修風景

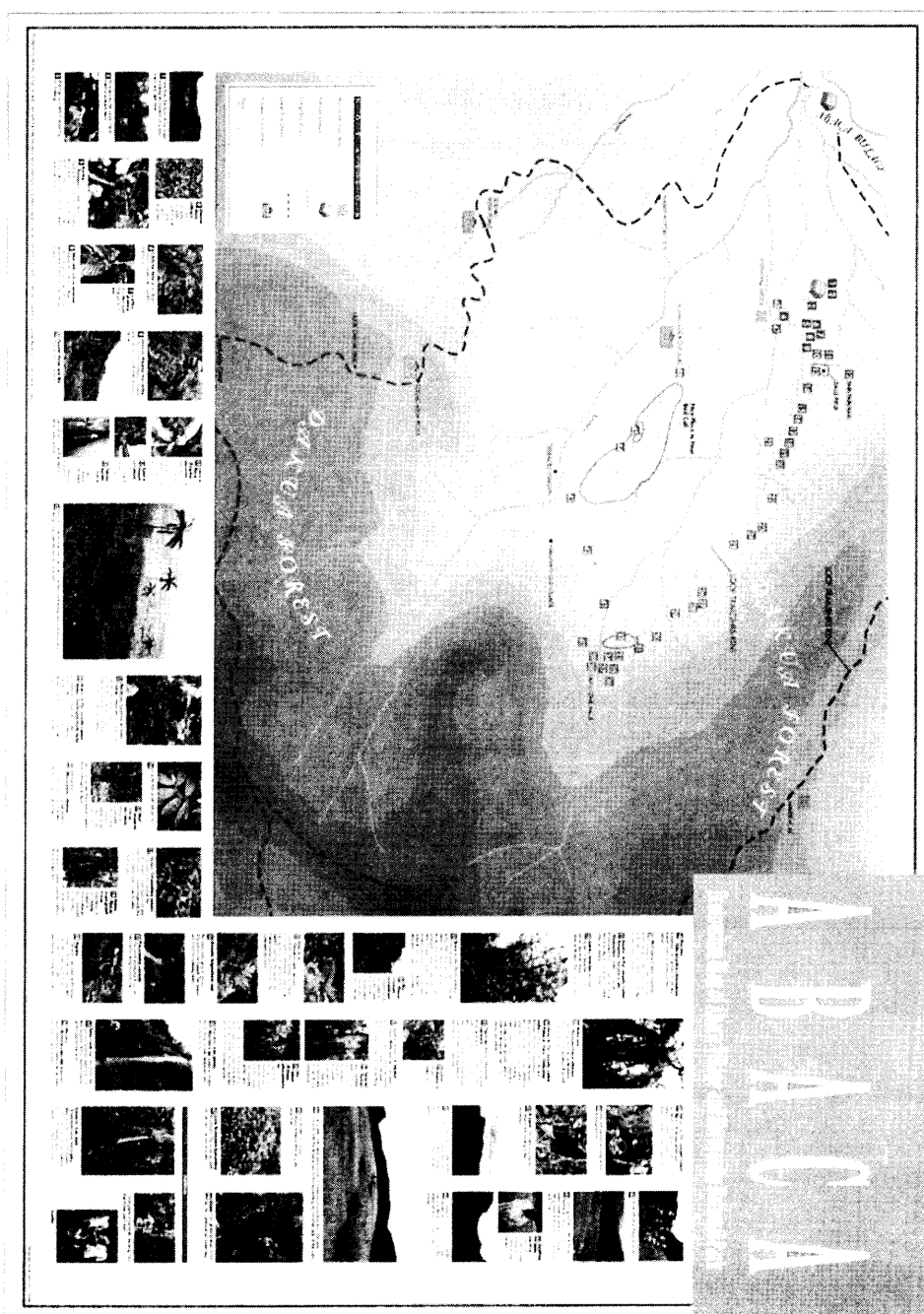


図3 アンバザ村エコツアーリズムマップ

4.3 エコツーリズムガイドブックの作成

上記の資源マップをベースとして、1998年度にはエコツーリズムガイドブックを作成した。制作における基本的姿勢は、できるだけ村民に関わってもらい「自分たちがつくったガイドブック」という意識を持ってもらうことである。そのため、フィジー観光省と土地信託公社、アンバザ・インフォメーション・センターおよび酋長以下村民の協力を得、アンバザ村民によるアンバザ村の紹介、というスタイルをとった。生物系の専門的情報は南太平洋大学や学者に原稿執筆やアドバイス協力を頂いた。核となる部分は、1998年8月と1999年1～2月の2回にわたる現地調査時における、酋長やコロヤニツ国立遺産公園のガイド、ウィメンズクラブのメンバー等へのヒアリングによって作成した。

ガイドブックはA5サイズ32ページで、3部構成である。第1部がアンバザ村の概要と生活習慣等の紹介、第2部が動植物などの自然、および村民と自然との関わり方の紹介、第3部がフィールドガイドである。特筆すべき内容は、一年間の自然や生活の流れをカレンダーにまとめたフェノロジーカレンダーと、エコツーリズムマップ、巻頭の村民全員の集合写真である。この3つの資料を用いることで、アンバザの人々がどのように自然と関わって暮らしを営み、観光客はいつどんなときに村を訪れるとどんな体験ができるのかがコンパクトに分かる仕組みとなっている（図4参照）。

印刷部数は5000部、うち2000部をアンバザ村に、2000部をフィジー観光省に送付し、残る1000部をPECCで使用する事とした。アンバザ村では、現在アンバザ・インフォメーション・センターで1冊\$5で販売されており、販売収益は村のエコツーリズム活動の資金源となっている。

4.4 モデルツアーの実施

これらの経過を経てエコツーリズム開発に取り組んできたアンバザ村のエコツーリズムが、実際に旅行者を受け入れたときにどの程度機能するか、どの程度の実効性を持つかを検証するため、また今後の改善点を明確にするために、モデルツアーを実施した（写真3）。

このモデルツアーは日本のNGOと旅行会社とが協力し、1997年12月25日から1998年1月1日までの8日間の日程で行った。参加者は20代から50代までの男女14人である。アンバザ村に4泊ホームステイし、エコツアープログラムを体験した。主なプログラムは次の通りである。

- ・村に入る際の儀礼である“カヴァの儀式”。
- ・熱帯林と草原を通る環状ルートのトレッキング。その後にバーベキューと川で水遊び。
- ・牛を使って畑を耕してサツマイモの植え付け、タロイモの収穫といった農業体験。

- ・村では教会を建てるために、近くの荒れ地にマツを植林し、2 年後に収穫してクリスマスツリーとして販売している。その植林体験ボランティア。
- ・伝統的な石焼き料理“ロボ”を村人と一緒に作る。
- ・村の婦人たちから、草を使ったスカートの作りかたを教わる。
- ・フィジーの歌とダンス、日本の歌と踊りの交流会。
- ・乗馬体験。

ツアー終了後に参加者へアンケート調査を行った結果、参加者全員がこのツアーで得られた体験に満足し、再度参加したいと回答した。また、このツアーをきっかけに、日本語を学ぶために学校に通いたいという希望を持つ村の子供が出てきている。これに対し、ツアー参加者からの発案で、村の子どもが教育を受けるための基金として、ツアー参加費の一部を積み立てる“エコツーリズムファンド”を作る準備を始めている。



写真3 モニターツアー実施風景

Seasonal Calendar of ABACA

This calendar shows you what natural and cultural events occur in each season. You will find that whenever you come, you will be welcomed by the villagers of ABACA.

	January	February	March	April	May	June	July	August	September	October	November	December
Seasons & Weather	WARM SEASON Rainy and Wet season. Hurricanes often occur.											
	COOL SEASON Dry Season. Usually fine weather. It's cool at night, warm in daytime.											
	WARM SEASON Rainy and Wet season. Hurricanes often occur.											
VILLAGERS Annual Activities	South-Southeast Wind (TOKALAU CEVA CEVA) blows throughout the year											
	Festivals											
	*22 Memorial Day District Festival *SEVU Harvest Festival of Yams + Easter Songs for Easter *Provincial Festival Festival held sometime between July and December *Independence Day *Church Anniversary Manning service every Sunday *25 Christmas Christmas Songs											
	Crops											
	CASSAVA, DOKO / taro, DOKO NI TANA / cocoyam, JAINA / banana, VUDI and YAOONA / Iava are planted and harvested throughout the year Harvest season of Yams KUMALA takes half year from planting to harvest MAOLI / papaya											
	Harvest											
	Wild Yams harvest											
	Fruits											
	QUAWA / guava MOI MADIRINI / mandarin orange TABANAU / dragon plum Pineapple KULU or UTO / breadfruit KAVIRA / Malay apple											
	Fishing & Hunting											
	UPLA DU, KA DU, TOKO / Prawns Fishing year round. Eat small freshwater fish Hunt CO / wild pig all year, usually on Saturdays CAUCALU, MAOLI, WA TOIRI KOLI and other vine tree flowers Honey bees make honey with MOI MADIRINI flowers DVACIA											
	Flowers											
	MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO											
WILDLIFE	Birds											
	MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO											
	Animals											
	BEKWA / fruit bat, DULUDULU WA / dragonfly, BEE / butterfly can be seen all year IRIBU / Mating Wren stretches across the sky and is shaped like a fish. A fish fan called IRIBU											
STARS												
MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO MOI MADIRINI, MAQO												

Note: Species names in capital letters are the ABACA names, small letters are the English name.

Note: Species names in capital letters are the ABACA name, small letters are the English name.

図4 アンバザ村フェノロジーカレンダー

アンケートの結果の概要は、次下の通りである。

(1) フィジーの知名度

- ・名前も場所も分かる 5
- ・名前は知っているが場所は分からない 5
- ・名前も場所も知らない 0

(2) フィジーから連想するイメージ*（複数回答があったもの）

ツアー開始前のイメージ

- ・サンゴ礁 5
- ・リゾート、南半球、南国、島 各 4
- ・暑い 3
- ・スキューバダイビング 2

ツアー終了後のイメージ

- ・人なつこい、陽気、笑顔 4
- ・暑い・熱帯、サトウキビ・畑 各 3
- ・カヴァ、ブラ、歌う、美しい歌声 各 2

(3) ツアーで印象に残ったもの

- ・風俗・習慣 11
- ・動植物 8
- ・風景 5
- ・歴史 5

(4) ツアーの魅力

- ・ホームステイをしたこと 9
- ・地元の人と友達になったこと 7
- ・ゆったりとした時間を過ごしたこと 4
- ・参加者と友達になったこと 4
- ・ガイドの自然観察 3
- ・ガイドの旅行者への接し方 3
- ・山歩きをしたこと 2
- ・ガイドの歴史解説 2
- ・ガイドの環境への配慮 1

4.5 環境保全としてのモデルトイレの建設

アンバザ村には村人が日常使用するトイレのほかに、ツーリスト用に 2 ヶ所のトイレが存

在する。いずれも村を流れる溪流の表流水を利用した水洗式トイレだが、浄化槽の設置方法が正しくなく、十分に機能していない。村を流れる溪流は、下流地域の水源として利用されているため、村を訪れる観光客が増加すると、衛生上の問題が生じるおそれがある。また、維持管理も不十分であり、利用者にとって快適なトイレとはいえない状況である。

エコツーリズムを今後も継続させていくためには、第一に村の生活用水の水質保全を図り、環境の美しさが持続するよう配慮する必要がある。この観点から、尿尿の衛生的な処理を施した環境低負荷型トイレを整備するとともに、村のコミュニティホール横にある観光客用トイレの排水設備の改修を行った。

整備に当たっては、ニュージーランド ODA のコンサルタントおよび技術者の協力を得、建設に必要な資材はフィジー国内で調達した。また工事に係る運搬や土木作業などの労働力は村民から無償で提供を受け、建築や浄化槽の設置等の専門的工事は地元の業者に発注した。

新たに整備したトイレの仕様は、つぎの通りである。

- ①男子トイレ、女子用兼身障者用トイレ、シャワーの3室からなり、屋外に洗濯槽を設置した。
- ②集落とトイレの高低差を考慮し、集落横を流れる川の上流部から地下パイプで導水し、地下貯水タンクに貯水し、トイレへも地下パイプで導水して給水することとした。
- ③村には電気がなく、室内に照明がつけられないため、屋根は採光のために部分的に半透明板を使用した。
- ④外壁は公園内のサイン板等とデザインを統一した。内壁は汚れが落ちやすい塗装の壁材を用いた。シャワー室内の内装はタイル張りとした。
- ⑤周辺に木を植えて、建物が目立たないように工夫した。

表3 アンバザ村におけるエコツーリズム収入の分配のルール

活 動	観光客支払額	分 配 額
Abaca村までの交通	8 FJD × 4 人 = 32 FJD	15 FJD : ドライバー (何人運んでいても15 FJDという協定) 17 FJD : プロジェクト * 1 人だけの場合、8 - 15 = -7 FJD がプロジェクトの負担 (赤字) となる
Abaca村への入村	5 FJD × 4 人 = 20 FJD	20 FJD : すべてプロジェクト
滝までのトレッキングガイド	5 FJD × 4 人 = 20 FJD	12 FJD : ガイド (3 FJD × 4) 8 FJD : プロジェクト (2 FJD × 4)
Batilamuまでのデイトリップガイド	10 FJD × 4 人 = 40 FJD	32 FJD : ガイド (8 FJD × 4) 8 FJD : プロジェクト (2 FJD × 4) * 遠距離のため、ガイドの取り分が4/5と高くなる
ロッジ宿泊	15 FJD × 4 人 = 60 FJD	60 FJD : すべてプロジェクト
キャンプ利用	10 FJD × 4 人 = 40 FJD	40 FJD : すべてプロジェクト
ホームステイ	30 FJD × 4 人 = 120 FJD	80 FJD : ホスト家族 (20 FJD × 4) 40 FJD : プロジェクト * 食料代を含む

5. エコツーリズム開発による社会への波及効果

5.1 地域社会への経済効果

現在、アンバザ村におけるエコツーリズム収入は、収入源ごとに分配ルールが決められている（表3 参照）。エコツーリズム導入以前における村全体の年間現金収入は 5,000FJD 程度と推定されるが、エコツーリズムにより村に新たにもたらされた現金収入は、年間 13,000～27,000FJD にもものぼり、平均では 18,600FJD と推定される。エコツーリズム収入のほぼ 1/3 が各家族に分配されているため、家族の収入はエコツーリズム以前に比べてほぼ倍増の計算である（図5 参照）。

また、わずかな商品作物を売って収入を得るには、20km 離れた町まで村人が往復する必要があるのに対し、エコツーリズムの場合、村人は従来のライフスタイルを変えることなく、居ながらにして従来の倍の収入を得られる点も大きなメリットである。

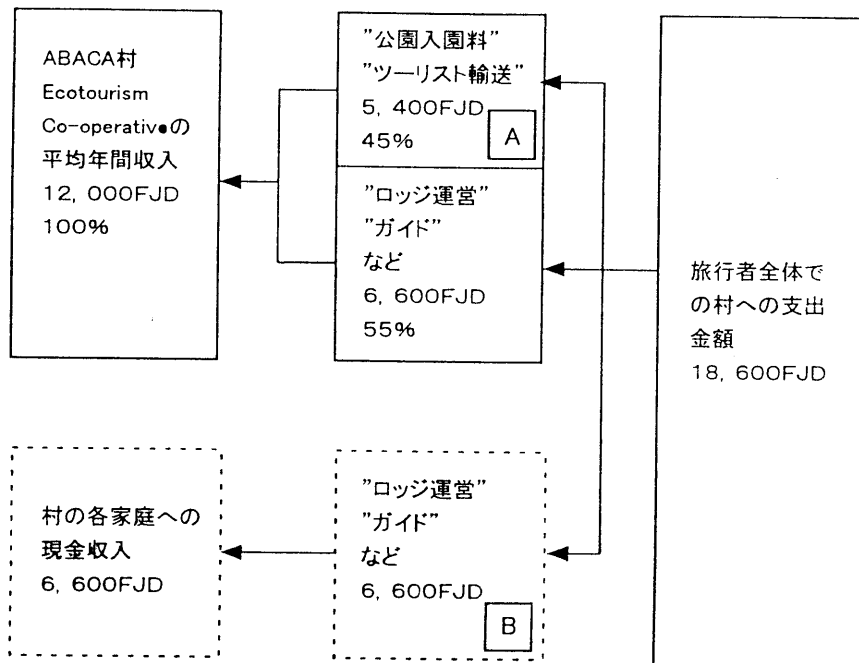


図5 「エコツーリズム収入の分配フロー」

5.2 人材の活性化としてのウーマンズクラブの活動

アンバザ村では、エコツーリズムプロジェクトを推進する協同組合のもとに、ウーマンズクラブが設けられ、村の女性達が手芸品の製作・販売を行っている。製品は財布、スル（腰巻き状のフィジーの伝統的衣装）などで、年間400FJDほどの売り上げがある。

5.3 環境保全意識としてのヴァヌア・スピリット（Vanua Spirits）の高揚

エコツーリズムガイドマップの作成プロセスにおいて、村人と研究者が協力しながら地域の動植物の種類、歴史、文化などを詳細に調査した。これは、非言語的知識を言語化し、慣習的知識を意識化する試みでもあった。

自然・文化・歴史が不可分一体のものとなって構成されている村の土地や生活環境は、フィジー語で「ヴァヌア」と呼ばれ、村人の物理的・精神的なよりどころとなってきた。エコツーリズム開発は、伝統的な「ヴァヌア」を専門的知識と村人たちにとっての価値の両面から評価し、エコツーリズム資源としての新たな意味づけを行い、環境保全に対する村人の意識を高める契機になったと考えられる。

5.4 生活の質の改善

エコツーリズムによる収益のうち、協同組合に還元される分は、村全体の利益となる目的のために諸費される。そのうち最大の比重を占めるのが、子供達の通学費である。

以前は、アンバザ村の子供達は、就学のために村から数10km離れたナンディの寄宿舎に寝泊まりし、週末と休暇期間しか家族とともに過ごすことができなかった。

現在は、エコツーリズム導入と前後して村までの道路が整備されたこともあり、10人の子供達は毎日近隣の都市であるラウトカの学校に車で往復している。その費用は1人当たり12FJD/週で、そのうち10FJDが組合から支払われている（年間約4,000FJD）。これにより、村人が最も重要視している家族とのふれあいが1年を通じて確保され、子供達は家族と離れて暮らす悲しみから解放され、村人は子供達の成長をじかに見守ることができるようになった。

6. アンバザ村エコツーリズム開発を通して得られた考察

フィジーにおけるエコツーリズムは、様々な困難を抱えつつも、資源の存在する村落中心に進める他はなく、解決困難な問題を避けながら、小規模でも着実に実現をはかるのが現実的な方策である。このような中で事業の成功のために、非営利の国際機関である PECC プロジェクトが果たす役割と意味は大きい。

このプロジェクトはまだ完了していないが、やがて対象地域で成果が実証されれば、フィジーはもとより、当地域の島嶼国の多くにおいて成功した観光開発モデルとして採用される

ことになる。現実には、多くの中央政府と地域が望んでいるのは、観光開発による入込み客増進策であり、エコツーリズム促進も来客者増大の期待に支えられている。しかし、サステイナブル・ツーリズムの見地に立てば、施策の有効性は、対象地域に与える経済効果とともに環境に対する影響度のレベルによって評価されなければならない。来訪者は、土地の生態系に与える影響を最小に留めて経済的利益をもたらすことが重要になる。訪問地の環境保全目的以外の大規模建設工事は、避けなければならないとすれば、観光投資の適正な対象は何かについて、慎重な調査研究が前提になる。本プロジェクトのトイレの実例は、観光旅行に不可欠な要件である”安全”要素としての衛生（疫病からの安全）と快適性（誘客要素）の両面で最も合理的な投資と考えた結果である。

フィジーには、既に地位を確立した大リゾートがいくつか存在しており、島内におけるエコデスティネーションの開発は、新市場の開発よりも、当面は現市場の補完的な誘客装置と位置付けられるかもしれない。しかし南太平洋島嶼国の多数は、多様な固有の自然、文化資源を活かして、純粋にエコツーリズムの目的地として成長していかなければならない。本報告は、これまでの調査分析の結果とこれからの方策を提示しているが、プロジェクトの最終的な成果については、一定期間を経て、当地域の入込みが計量されるまで評価することはできない。幸いなことに、この村落中心のエコツーリズムは、大量の誘客を前提にするものではなく、一箇所一時に、二十人以内の訪問者を期待する程度の規模である。それでも継続して入込み客を確保するために、誘客活動をいかに行うか、旅行会社の協力を得るべきか、あるいは専門メディアへのPR記事だけでよいのか、今後の研究課題であるが、それもやがて明確になるであろう。また自然環境への影響については、最大の配慮が払われているが、旅行者を受け入れる住民側のライフスタイルに及ぼす社会、文化的な影響は、長期的には懸念すべき課題と思われる。

その意味で、本報告はケーススタディの現段階における中間報告である。この7年間のフィジーエコツーリズムプロジェクトを通して、他の地域での環境保全を伴った持続可能なエコツーリズム開発のために、開発のプロセスパターンおよび必要な組織・人材の役割分担・相互関係を模式化すると以下の通りである（図6、図7 参照）。

コロヤニツ国立遺産公園内の他の村は、それぞれ異なるエコツーリズム資源を有しており、エコツーリズム導入に意欲を見せ始めている村がある。土地信託公社のプロジェクトとしては、各村間のルート整備や資源調査、集落間の連携等によって、公園全体を一体化したエコツーリズム開発にとりくむ方向性を示している。アンバザ村におけるエコツーリズムが、真に持続可能かつ自律的観光として成長しうかどうかについては今後の村の動向に委ねられているが、同村でのケーススタディ結果をつねにフィードバックしながら開発を進めていく姿勢が必要であろう。

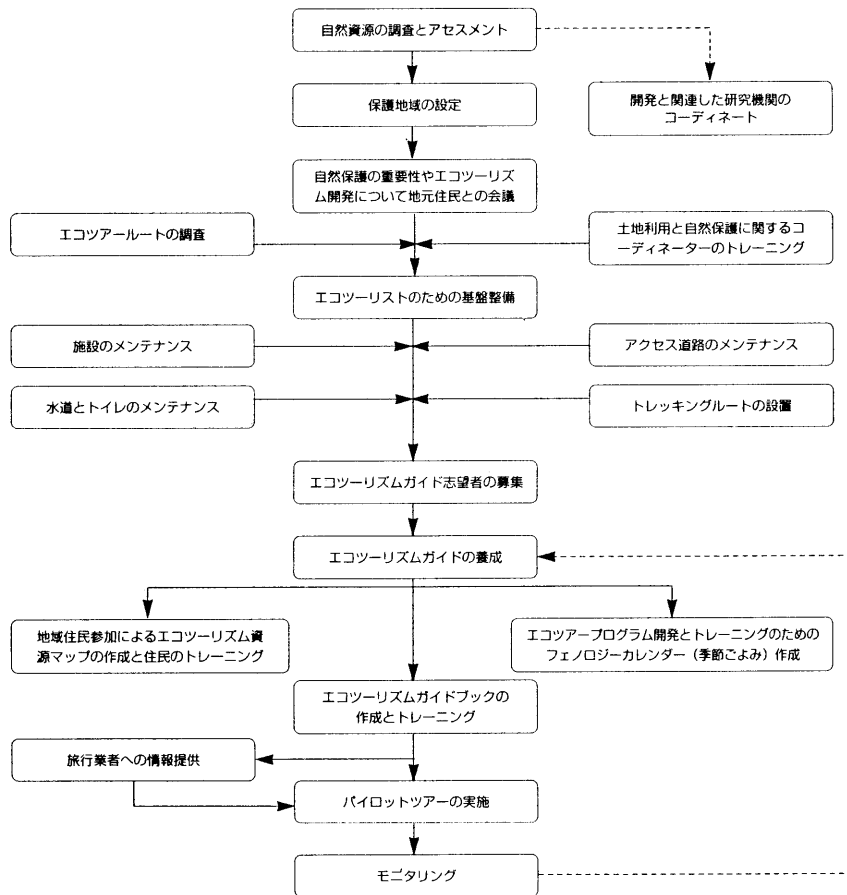


図6 「エコツーリズム開発のプロセス」

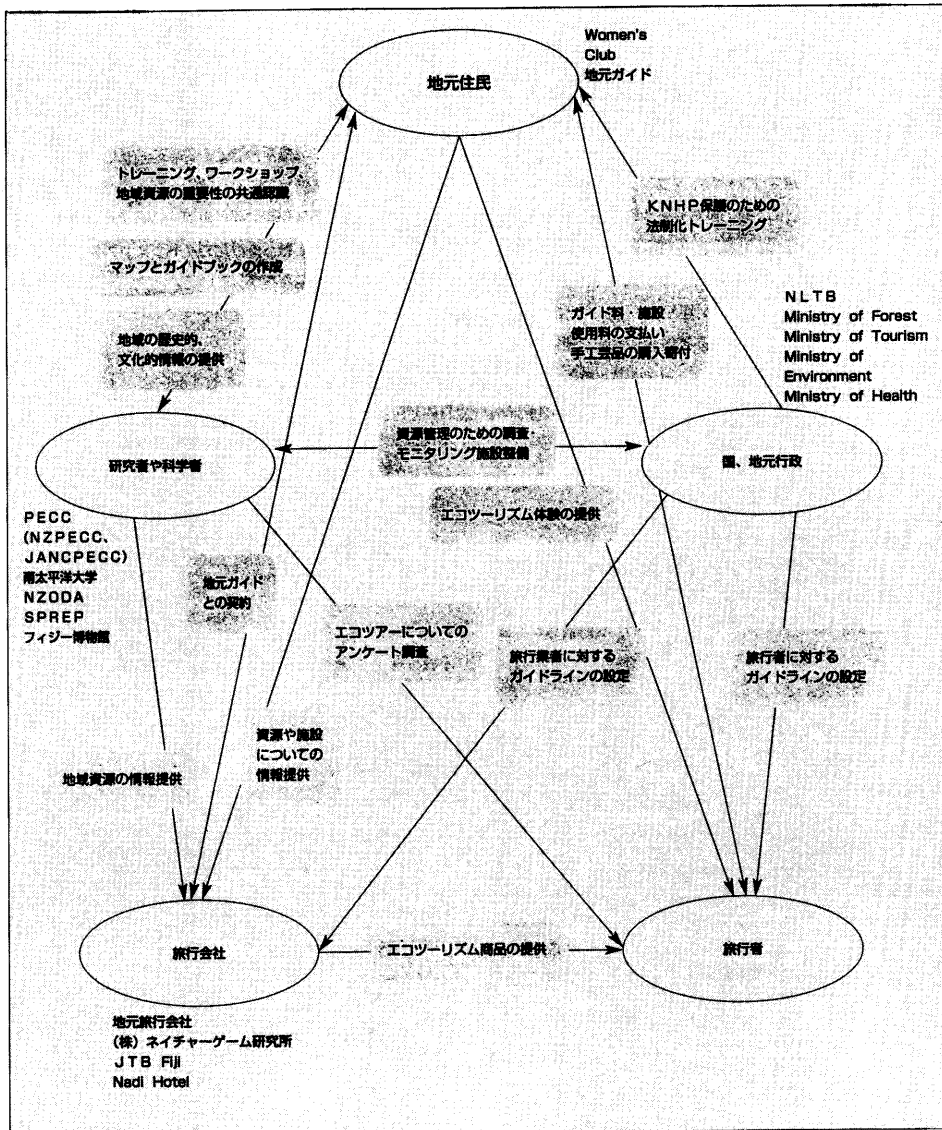


図7 エコツーリズム開発に必要な組織・人材の役割分担と相互関係

注

- (1) 国立と冠されているが、フィジーには現在のところ国立公園に類する公園システムは確立されていない。したがって、国立遺産公園も法に基づいて整備されているわけではなく、「国の」という程度の意味合いである。
- (2) UNDP Fiji Poverty Report 1996 によれば、最貧レベル 10% に属する家族の平均現金収入は 33.71FJD/週である。

文 献

太平洋経済協力会議日本委員会編

1999 「フィジーにおけるエコツーリズム開発と開発効果：Abaca 村の開発を事例として」『報告者が不明』太平洋経済協力会議日本委員会。

United Nations Development Program

1996 *Fiji Poverty Report*. UNDP.

